令和５年度

香川大学大学院地域マネジメント研究科

教育課程連携協議会報告書

令和６年７月

目　次

I.　教育課程連携協議会委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

II.　教育課程連携協議会次第・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

III.　教育課程連携協議会記録（令和６年７月１０日）・・・・・・・・・・・・・ 5

IV.　教育課程連携協議会資料一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

V.　委員名簿出欠表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４３

令和５年度　国立大学法人香川大学大学院地域マネジメント研究科

第５回教育課程連携協議会　委員名簿

令和６年７月１０日時点

経済界 （五十音順）	（議長） 半井　真司	四国旅客鉄道㈱　相談役 四国ツーリズム創造機構　代表理事
	綾田　裕次郎 （代理）菅　弘	（株）百十四銀行　取締役会長 （株）百十四銀行　取締役常務執行役員
	白井　久司	四国電力（株）　取締役副社長執行役員
	髙濵　和則	大倉工業（株）　代表取締役会長
	竹内　麗子	香川経済同友会　特別幹事
行　政 （五十音順）	大山　智	香川県　副知事
	加藤　昭彦	高松市　副市長
大　学	松永　裕己	北九州市立大学大学院 マネジメント研究科　研究科長
報道機関	相川　恵祐	ＮＨＫ高松放送局　局長

地域マネジメント研究科
令和５年度教育課程連携協議会

日　　時　　令和６年７月10日（水）13：30～15：30（予定）

会　　場　　香川大学幸町北キャンパス　本部棟４階　大会議室

議　　題　　・令和５年度の活動報告

・意見交換と質疑応答

香川大学大学院地域マネジメント研究科令和 5 年度教育課程連携協議会（2024 年 7 月 10 日開催）

【中村　正伸　研究科長】

ちょっと時間前ですけれども、今回の事前訪問をさせて頂いた際に、結構多くの方から、若者の県外就職はどうやっていけばいいかという非常に大きな課題を頂きました。今日お配りしている、周知のための大学案内というのがあるんですが、これは現役生、大学生なんですけれども、香川大学の学生が香川県にどれぐらい就職しているのかというのを学部ごとに出したグラフが付いています。

医学部はだいたい 60%弱ですとか、教育も 50%弱が地元香川に就職しているのですけれども、一番少ない学部ですと 17%と、20%を切っているという状況にあります。ちなみに一番少ないのは工学部、創造工学部というんですが、定員が 330 名ですので、330 名のうち 17%程度は香川に就職、それ以外は県外に出てしまうというところがあります。他の法学部と経済と、あと農学部はだいたい 30%弱ぐらいが地元に就職しているという現状でして、ちょっと創造工学部が厳しいなと見てとれるところでございます。ちょっと参考資料としてお配り致しました。

【中村　正伸　研究科長】

では、時間となりました。ただいまから香川大学大学院地域マネジメント研究科、令和 5 年度教育課程連携協議会を開催させて頂きます。

まず最初にご挨拶申し上げます。私、中村でございますけれども、令和 5 年 10 月より研究科長を務めさせて頂いております。昨年度は、思わぬ形で代理ということで、この場でお話しさせて頂きましたけれども、10 月より研究科長を務めさせて頂いております。本日の司会進行は、私、中村が務めさせて頂きます。宜しくお願い致します。

委員の皆様におかれましては、ご多用の中、また大変お暑い中、お集まり頂きまして誠にありがとうございます。厚く御礼申し上げます。この協議会は、香川大学大学院地域マネジメント研究科における高度かつ実践的な経営に関する教育・研究の実施体制の充実を目的と致しまして、産業界・行政・マスコミ等との連携により教育課程を編成し、教育・研究・社会貢献を円滑かつ的確に進めていくために設置しております。この研究科が 2004 年にできたんですけれども、それ以来、毎年開催させて頂いているというものでございます。

委員の皆様におかれましては、今年度も、昨年度の振り返りになるんですけれども、当研究科の運営に関して率直なご意見を賜れれば幸いでございます。宜しくお願い致します。

それでは、現在、委員をお願いしております方々をご紹介申し上げます。まず、私の横におられますが、四国旅客鉄道株式会社相談役、四国ツーリズム創造機構代表理事の半井真司様です。

【半井　真司　委員長】

どうも半井でございます。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】

お願いします。続きまして、株式会社百十四銀行取締役会長、綾田裕次郎様は、本日はご都合が悪く欠

席となっております。代理と致しまして、取締役常務執行役員、菅弘様に出席頂いております。菅様、お願い致します。

【菅　弘　委員】
百十四銀行の菅でございます。どうぞ皆様、宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、大倉工業株式会社代表取締役会長、髙濵和則様。

【髙濵　和則　委員】
大倉工業の髙濵でございます。また宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、香川経済同友会特別幹事、竹内麗子様。

【竹内　麗子　委員】
香川経済同友会の竹内でございます。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、四国電力株式会社取締役副社長執行役員、白井久司様。

【白井　久司　委員】
四国電力の白井でございます。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、香川県副知事、大山智様。

【大山　智　委員】
大山でございます。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、高松市副市長、加藤昭彦様。

【加藤　昭彦　委員】
加藤でございます。どうぞ宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、北九州市立大学大学院マネジメント研究科研究科長、松永裕己様。

【松永　裕己　委員】
松永です。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
最後になります。NHK 高松放送局局長、相川恵祐様。

【相川　恵祐　委員】
相川です。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
お願いします。以上になります。皆様、ご要職にありながらこの様にご協力を頂いておりますことを重ねてお礼申し上げます。
ここで、議長を互選により選出することになっております。例年同様、半井様に議長をお願いしたいのですが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。ありがとうございます。では、半井様、どうぞ宜しくお願い致します。

【半井　真司　委員長】
それでは議長を務めさせて頂きます。円滑な議事の運営にご協力を宜しくお願いします。ちょっと最近、ダイエットのしすぎで声があまり出なくなって、聞きづらければご勘弁頂きたいと思います。
先程、中村研究科長のご挨拶にもありました様に、今回はビジネススクールの現状を把握し、ご意見を頂くことが主旨でございますので、大学側に進行をお任せしたいと思います。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。それでは、以降しばらく私が進行を務めさせて頂きます。
それではまず最初に恐縮でございますが、株式会社百十四銀行取締役常務執行役員、菅弘様は、初めてご出席ですので、一言、宜しくお願い申し上げます。

【菅　弘　委員】
皆様、こんにちは。ご紹介頂きました、百十四銀行の菅と申します。今回、前任の金本を引き継ぎまして、今回の委員に就任させて頂きました。
実は、私は昭和 63 年 3 月にこの香川大学経済学部経済学科を卒業しました。母校でございまして、本当に三十数年ぶりにこの正門から入ってきたという様なことで、非常に懐かしく思うと同時に、変わっている部分と変わってない部分というのが非常に新鮮味を感じて入りました。
私の我が母校であります香川大学のさらなる発展と、皆さん、学生の優秀な人材の輩出に微力ながらお役に立てる機会を頂きましたことを大変うれしく思っています。皆様、どうぞ引き続き宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
　ありがとうございました。どうぞ宜しくお願い致します。
　大学側でございますけれども、本日 12 名の教員と石川事務課長補佐、併任大学院地マネ係が参加させて頂いております。加えて、記録担当として研究科事務補佐、松岡が陪席しております。宜しくお願い致します。
　座席の方は、お手元の座席表の通りとなっております。それでは、私から順に参加者をご紹介致します。
　まず、研究科長の中村でございます。宜しくお願い致します。
　続きまして、副研究科長の原真志教授でございます。

【原　真志　副研究科長】
　原でございます。宜しくお願いします。昨年は急に脳出血をしまして、皆様にご迷惑、ご心配をお掛けしました。半年程入院しまして、12 月に無事退院し、この 4 月からまた授業もさせて頂いております。考えたり、しゃべったりという商売道具を神様はちゃんと残してくださったなというところで、またこれからも皆様のご指導ご鞭撻を頂きたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
　続きまして、板谷和彦教授でございます。

【板谷　和彦　教授】
　板谷です。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
　続きまして、大﨑孝徳教授でございます。

【大﨑　孝徳　教授】
　大﨑と申します。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
　続きまして、西中美和教授でございます。

【西中　美和　教授】
　西中です。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
　はい。三好先生はまだいらっしゃっていないので、飛ばさせて頂きますが、それでは、吉澤康代教授でございます。

【吉澤　康代　教授】
吉澤でございます。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、佐藤勝典准教授でございます。

【佐藤　勝典　准教授】
佐藤でございます。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、島根哲哉准教授でございます。

【島根　哲哉　准教授】
島根です。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
続きまして、長町康平准教授でございます。

【長町　康平　准教授】
長町です。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
山本靖特命教授でございます。

【山本　靖　特命教授】
山本でございます。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
西村美樹特命講師でございます。

【西村　美樹　特命講師】
西村でございます。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
石川弘子香川大学幸町地区統合事務センター事務課長補佐でございます。

【石川　弘子　幸町地区統合事務センター事務課長補佐】
石川です。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
松岡美佐地域マネジメント研究科事務補佐でございます。

【松岡　美佐　地域マネジメント研究科事務補佐】
松岡です。宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
はい、今、三好先生いらっしゃったので。三好秀和教授でございます。

【三好　秀和　教授】
三好でございます。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
はい、全員無事揃いました。よかったです。以上が、本日参加して頂きます教員・職員です。どうぞ宜しくお願い致します。

それでは、ここで配布資料の確認でございます。本日また分厚いファイルをお配りして恐縮ですけれども、こちらの薄青いファイルでございます。こちらを配布させて頂いております。この連携協議会の規程類、座席表、出欠表、会議資料等々を入れさせて頂いております。また、ファイルの後半には、私共が出しておりますいろんな冊子類を付けさせて頂いております。要覧ですとか、「地域マネジメント」という情報誌を付けさせて頂いております。また後程ご覧頂ければと思います。

資料は問題ないでしょうか。大丈夫でしょうか。

それでは、ご報告とさせて頂こうと思います。まず、資料の１番がございます。資料１番をご確認ください。こちらの資料が「研究科の概要及び今後の課題と目標について」というところでお付けしている資料になります。まずこれを使って私の方から昨年度の報告を申し上げてまいります。

まず第１点と致しまして、第三者機関から適合認定を昨年度無事取得、再度継続で認定を頂きました。大学基準協会、外部の評価機関ですが、そこより適合であるという評価を頂いております。これは５年間に１回のサイクルで頂くものになっておりまして、研究科の戦略、教育内容、教員組織、科についての自己点検評価になっていて、これについてはまた後程お話ししたいと思います。

めくって頂きまして、研究科の話に入ります前に、まず香川大学は何をやろうとしているのかという話を少しさせて頂きます。めくって頂いて 3 という数字が入っております。香川大学のミッションというところです。これは香川大学がここ数年ずっと掲げている、「持続可能な地方分散社会の実現に貢献する人材の育成と研究の推進」をビジョンとしておりますというところです。その下に 7 つ程項目があります。バイオ、ゲノム研究推進ですとか、博士後期課程の開設と人材の育成ですとか、こういったところが、今、香川大学が全体として取り組んでいるところになります。この中身を見ていきますと、それぞれ、我々が特にいわゆるリカレントですとか、リスキリングというところが求められておりまして、この部分は特に関係するところというふうに理解しております。ここまでが前段になります。

続きまして、具体の話に入って参ります。目次と書いております。まず、前半はこの研究科の概要と、

2つ目のアントレプレナーシップ育成プログラム、この2つにつきまして、私と各担当教員からお話を申し上げて、それが終わりましたら、識者の皆様からコメントを1回頂戴したいと思っております。

めくって頂きまして、目次、研究科の概要というところでしております。これは特にこれまでと変わらずというところになりまして、そもそも経営専門職の基本的使命はどういうものなのかですとか、その中で地域マネジメント研究科の目的というところです。地域活性化に貢献するというところはずっと変わらずというところで、目的として定義させて頂いているというところになります。

付帯とのお話なので少し飛ばさせて頂きますが、この目的に応じて次のページ、養成すべき人材像というところで3つの輪がありますけれども、ビジネスリーダー、パブリックプロフェッショナル、また、地域プロデューサーというところを我々が養成すべき人材像として定めているというところになります。

この人材像育成を目標に致しまして、ビジョンと掲げておりますのが、その下のページです。地域とグローバルを相互に共生する形で結びつける。理論知、実践知を融合した教育・研究によって地域活性化に貢献するビジネススクールということをビジョンに掲げております。

このビジョンを実行していくために、次のページをめくって頂きまして、薄青い枠に表してしておりますが、戦略ということで6項目挙げさせて頂いています。これもここ数年変えることなくこの6項目、日本版の MBA を突き詰めていこうですとか、実践的な取り組みの支援というところで、修了生も引き続き支援をしていくこともやっていくという点ですとか、戦略的な産官学連携の推進、或いは修了生が今ちょうど 590 名になりましたので、こういうところをベースとして力を結集していくというところ。あと、加えまして、地域活性化に必要な国際化の要素ですとか、或いは、地域活性化に貢献する研究の促進というところ、この6点を戦略として掲げております。これも変更ありません。

この後、我々の特色を少し纏めさせて頂いております、中四国でMBAを発行します、国立大学法人では唯一の存在であるというところです。現在、1年生は21期生になっております。この「地域」という名前が名称に入っているビジネススクールとしては我々だけというところになっております。

めくって頂きまして特色の 2 ページ目になります。特色としては、専任教員のバックグラウンドが多彩であるということがまず言えます。それから、理論と実践・実務の双方向教育を進めている。また、少人数教育ですとか、社会に配慮した教育環境、人的ネットワーク作りというところを特色にしております。

また、そのために、連携・融合という下のページに行きますけれども、経営領域と地域公共領域、理論と実践、また多様な学生、そして大学と地域、そして専任教員と非常勤教員というところで連携・融合を図っているというところになります。

ここまでがまず最初の研究科の特色のご紹介の振り返りでございました。

めくって頂きまして、13 と書かせて頂いておりますが、ここからが今、学校、大学全体として第4期中期目標中期計画、6年間なのですが、この6年間のうち、今3年目に入っております。令和5年、過去4年、5年と来まして、その2年間の振り返りになるんですけれども、今、このアントレプレナーシップ育成プログラムというところで学長戦略経費も頂いて支援事業としてやっているというところになります。

今、少しお話をしたんですけれども、大学全体としての第4期中期目標計画が令和4〜9年ということがございまして、我々としては専門職業人育成大学院でございますから、高度専門職業人を育成していくというところが中期目標としてありまして、そして、地域マネジメント研究科においては、地域社会課

題を素材とした実践型プログラムを充実させていくというところを必ず力を入れているというところになります。

そのために具体的に何をしているかというところですけれども、もちろん、授業科目もたくさんやらせて頂いているのですが、特にこのアントレプレナー育成プログラムというところでやらせて頂いているのが、次のページの構築・実証研究になります。このときに、私共はアントレプレナーを、起業という意味もあるんですけれども、もう少し広く考えていまして、社会課題も含めたアントレプレナーシップというところで、今いろいろな取り組みを進めています。

その中で具体的に実施している内容として考えておりますのが、①から⑤番の 5 つ、5 本柱ということで考えております。この 5 つを具体的な取り組みとして今、進めているところになります。アントレプレナーシップの育成促進ですとか、持続可能な観光による地域活性化、或いは、地域課題解決についての事例調査ですとかプログラムの開発、そして、第二創業と中途採用マッチング。そして、最後には修了生中心のエコシステム創りというところで、アントレプレナーシップ関係、特にこの 5 本柱で今、いろいろ事業を進めているところになります。

めくって頂きまして、ここから 17 ページと書いているところが、今お話、5 本柱と申し上げましたが、この個々の一つ一つについてのご紹介を担当頂いている教員の方から少し説明をさせて頂こうと思います。まず 1 つ目、①「アントレプレナーシップの育成促進について」です。吉澤先生、では、簡単にお願い致します。

【吉澤　康代　教授】

吉澤が説明させて頂きます。アントレプレナーシップ関連プログラムですけども、複数の組織と複数の先生方にご協力頂きながら進めております。

まず 1 点目は、地域人材共創センターというのが香川大学にはあるんですけれども、そちらがリカレント専門講座というのを立ち上げておりまして、そちらに地域マネジメント研究科として「アントレプレナーシップ入門（事業計画作成編）」という講座を提供しております。その他にも、別の先生から説明があるかもしれませんが、「瀬戸内のサスティナブル観光資源としての食の体験コンテンツを創造する」という科目も同時に提供しております。こちらは社会人向けに、学外の方に有料で参加して頂く様な講座になっておりまして、こちらに参加した方が地マネにも関心を持って頂くという様な流れを作っております。

【中村　正伸　研究科長】

よろしいですか。農学部のところはどうしましょうか。最後の。これもご紹介頂いて。

【吉澤　康代　教授】

追加ですけれども、アントレプレナーシップ入門講座ではなくて、アントレプレナーシップ育成という科目も公開講座で昨年から開講しているのですけれども、こちらを今年度、本科目にして 2 単位の科目として立ち上げております。こちらは主に学生を対象にして実施しているということです。

そして今、中村先生からご案内のあった丸ポツの 4 番目、農学部と連携しての公開講座も、地域人材共創センターが実施するリカレント専門講座の方で、農学部、それから JA さん、ジェトロと協力しながら

科目を立ち上げて、有料で県外の社会人の方に提供している科目になっております。よろしいですか。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。はい、吉澤先生からのご紹介でした。
では、丸ポツの 2 つ目ですね。「国際アントレプレナー育成ワークショップ」、山本先生、お願いします。

【山本　靖　特命教授】
山本でございます。私の担当している国際経営では、外部講師を招いて、様々な各国のビジネスの専門家を呼んで、様々な文化、ビジネスプロトコル、そういったものを講義して頂いております。
その一環として、国際アントレプレナー育成ワークショップということで、50 ページをご覧頂きたいのですが、第 1 回目は、このワークショップにスウェーデンの起業家の方を招いて、英語でワークショップを行いました。続いて、昨年度第 2 回目ということで、アメリカ人のヒデコさんという方ですけれども、小豆島に移住されたということで、私の長年の知人でしたので、彼女を招いて、同様に英語のワークショップを行いました。非常にご参加頂いた方に刺激を与えたと思っております。
それから第 3 回目、51 ページをご覧ください。フジタニさんはフランスのスタートアップの起業を長年手伝っていまして、今現在はアメリカの大手の AI の会社の MD の AI 担当のディレクターとして活躍されています。彼女を招いて、フランスの企業文化、これは日本と同じ様に起業家精神というのはあまりなかったんですけれども、近年、非常に政府、大学含めてスタートアップ文化を広めているということで、その話を頂いたことと同時に、直近の AI の最新技術について語って頂きました。私は以上です。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。
続きまして、原先生から NEC の共同研究について、簡単にご紹介ください。

【原　真志　教授】
はい。私から紹介させて頂きます。NEC は、正確には NEC ソリューションイノベーター株式会社ですけれども、こちらとの連携共同研究は一昨年度から始まっておりました。最初は Setouchi-i-Base が間に入って、仲介して繋いでいきましたこともあって、Setouchi-i-Base を対象にした、Setouchi-i-Base のコーディネーターや Setouchi-i-Base を利用している方を対象にして、どの様な形でアントレプレナーシップと言いますか、起業家プロセスがうまくいくのかというのを、ビジョンの形成というものを手掛かりに探るということを一昨年度はしました。
そして昨年度に関しましては、NEC ソリューションイノベーターの中のイントレプレナーと言いますか、社内でイノベーティブな人間をどう活用できるかということを、それを応用したいということで、この社の研究開発の担当者を対象としたヒアリングを行って、そうしたビジョンなり、最近ではパーパスという言い方もありますけれども、要するに何をするべきかという大きな方向性をどのタイミングでどの様にしてうまく持って、そういうイノベーションが起こせるかということを合同で取り組んでやったものです。

資料 20 にその詳細の内容をまとめたものがございますが、最終的には一番最後の 121 ページのところを見て頂ければ分かるのですが、当初はこのビジョンというものが効果的ではないかというのはよくアントレプレナーの研究ではあるのですけれども、いや、しかしながらよく考えてみれば、ビジョンというものがきちんと腹落ちできるものが見つかれば、みんな苦労しないのだと。それがどうも出来合いのそういうビジョンをつくるフォーマットのフレームワークがいろいろあって、この NEC の中でも試していたのですけれども、それがしっくりこないという声があって、その声をしっかり聞いて、何が問題なのかというのを徹底的に何回もヒアリングを繰り返して行いました。その結果、ビジョンの明確化というよりも、もう少ししっかりと、そのビジョンというものが人為的につくられるものではなくて、自分の中にあるものだろうと。最初にビジョンを持つとうまくいくよという様な、そういうビジョン神話からは脱却しないといけないのではないかと、腹落ちしないビジョンは機能しないといったところから、その人のこれまでの経験というものをもう少し深追いをして内省して頂いて、その中から攻防する中でだんだん見つかってくるという様な、そういった経験ベースのプロセスを重視したアプローチが実は有効ではないかということが見えてきたというところでございました。それをさらにどの様に展開できるかというのは、今後の課題となっております。以上です。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。
以上がこの①番のアントレプレナーシップの育成促進となります。
では、②に参ります。「持続可能な観光による地域活性化」。まず、1 つ目、西村先生、お願いします。

【西村　美樹　特命講師】
西村でございます。宜しくお願いします。
こちらは先程吉澤先生の方からも説明を少し頂いたんですけれども、37 ページにこういったチラシが入っているかと思います。こちら「瀬戸内のサスティナブルな観光資源としての食の体験コンテンツを創造する」というチラシがあります。人材共創センターの方で、こちらのリカレント専門講座を開講させて頂きました。これというのは、来年度、関西大阪万博がありますし、瀬戸芸もあります。徳島県などでは県を挙げて食の体験コンテンツを募集しますみたいなことを大々的にされていまして、香川県でも素晴らしい食や伝統文化がございますので、そういったものをコンテンツとして作っていって頂きたいなと思いまして、この講座を開講しました。募集定員 12 名だったんですけれども、満席を頂きまして、好評を得ることができました。以上です。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。②番の 2 つ目のポスト MBA の県市間交流会、これは佐藤先生、お願いします。

【佐藤　勝典　准教授】
県市交流会でございますが、今年度は観光をテーマと致しまして、地域マネジメント研究科を修了した方で、ポスト MBA として残られている方に修了後のご活動についてご報告を頂いて、県や市町と交流

する機会を設けたものでございます。以上です。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。
では、ページをめくって頂きまして、③です。「地域課題解決についての事例調査、プログラム開発」とありますけれども、吉澤先生、宜しくお願いします。

【吉澤　康代　教授】
こちらは何の先進地域かということですけれども、地域課題を素材に大人の方の人材育成に取り組んでいたり、或いは広域的な人材交流を進めている地域をいくつか選んで、ここ 1、2 年実地調査をしております。
昨年度は、島根県をフィールドにしたのですけれども、離島で隠岐島の海士町というところをリサーチしてきました。内陸の方も伊野地区、美郷町という所を西村先生がフィールド調査されていて、海士町は、私はあんなに先進地域だとは知らずに、たまたまどこかで大人の島留学というキーワードで海士町が私の中で引っ掛かってリサーチしたのですけれども、離島の課題と、いろいろな離島という環境をフィールドにしながら、次世代経営者育成の研修を提供していたり、20 代の若者を毎年 200 人、人口 2,000 人ぐらいしかいない所に毎年 200 人の若者が毎年毎年訪れる様な仕組みを導入していたりとか、そういうケースをリサーチしてきました。以上になります。

【中村　正伸　研究科長】
ありがとうございます。ポツの 2 つ目、「アントレプレナーシップ育成プログラムについて対象地域の検討」、これは西村先生、宜しくお願いします。

【西村　美樹　特命講師】
西村です。こちら、アントレプレナーシップを育成するにあたって、やはり産官学連携できるのが望ましいかなと思いまして、行政もご協力頂いてというところで、丸亀市の離島振興室とは、かなり島のいろいろな研究をしておりましたので、以前から親しくしておりまして、ちょうど昨年度は讃岐広島を 3 年間かけてどういうふうにしていったらいいかというモデルケースとして取り組んでいるということだったので、そちらの讃岐広島をベースにして地域課題を訪問して伺って、皆さんに実際何ができるかを考えて頂きました。
実際には、モビリティーに関するものですとか、あと、お土産物ですとか、ちょうど港が新しくなりましたので、待合所で販売できる様なものを考えるとか、そういったことを皆さん考えてくださいました。以上です。

【中村　正伸　研究科長】
ありがとうございます。③は以上で、続いて④番に行きます。続きまして、第二創業と中途採用マッチング、これは三好先生、2 つともお願いいたします。

【三好　秀和　教授】

事業承継人材の育成ということで、大学・地域共創プラットフォーム香川の補助金を活用しようと、金融機関、百十四銀行様、香川銀行様とか、あとは日本政策金融公庫様とか、信用保証協会様とか、かがわ産業財団のご協力も頂きながら行ったのですが、ちょっと県の方で採用ができなかったということで、残念ながらこれはちょっと立ち止まっております。

2番目のサーチファンドというのは、山口キャピタル様がサーチファンドをされておりまして、百十四銀行様にも出て頂いて、香川県信用保証協会の方も出て頂き、香川の現状を知った上でサーチファンドの募集を香川県もしているんだという仕組みを、OB も含めて講習を行ったということで、これはかなり反響があったものでございます。

それと、2番目のポチの方に入りますが、金融リテラシーの向上ということで、これは111ページで資料10になるんですけれども、これは4年目でございまして、金融リテラシーの向上のために金融セミナーを中心に行っているんですけれども、今回ちょっと特別に特記で申し上げたいのが、文化サークルを、実はさっきもしつこい質問もあって遅れてしまって申し訳ないんですけれども、金融証券研究会という勉強会を月に2回、実はOBも含めてやっております。証券アナリストの一番難しい証券分析というものに今回トライして、現役生は落ちてしまったのですけれども、卒業生である四国旅客貨物のイシバシ君という、財務部にいる彼が合格を見事しまして、OB なんですけれども、実際の合格者が出ました。新たにこの10月の試験に、落ちた2名はまた受けていくということで、少しずつ火がついてきたなと思っております。以上でございます。

【中村　正伸　研究科長】

はい、ありがとうございます。

では、ページをめくって頂きまして、最後の⑤番になります。「修了生中心のエコシステム創り」になります。私の方からお話ししますけれども、まず、アントレプレナーシップ関係のいろんな講座やプログラムに関しまして、修了生に実際に講師として来てもらうという取り組みを今、進めております。必要なデータベース作りも進めているというところになります。やはり香川にとっての先輩に来てもらうというところで、お話として実態に即したお話をして頂けるということで進めているところであります。

2つ目のポツですが、ポストMBAですね。これは修了生の取り組み、研究を修了後もサポートし続けようというところで、これも仕組みとしてずいぶん定着して参りまして、令和5年は26件でしたが、そこからまた増えて、今36件を教員が手分けして修了生のサポートをしています。

では、3つ目のポツに行きます。「博士後期課程への修了生の進学誘発」、板谷先生、これをお願い致します。

【板谷　和彦　教授】

はい、板谷です。今年度から創発科学研究科の後期博士課程、これは、前期博士課程は2年前にできていたんですけれども、博士課程ができました。そこに対しては、地域マネジメント研究科の修了生や現役の卒業生もいれば、卒業生も当然、入学資格があるので、向学心のある学生はこちらに来てもらおうということで、そういう働きかけをしていく途上にあります。

それから、全学ではリキャリスキル教学センターという、主に社会人を大学院に引き寄せるというワ

ンストップのセンターができました。私もそこの副センター長ということで拝命しましたので、広く全学ワンストップで、MBA も含めまして、社会人、皆さんの所属する学生さんがこちらに高い学びを来てもらう様な働きかけ、それから、ひいては博士、PhD を取って頂く様な道筋も付けましたので、広く周知して頂きたいと思います。以上です。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。最後になります。「修了生との EBPM 研究会」、島根先生、お願い致します。

【島根　哲哉　准教授】
島根です。宜しくお願いします。資料は 21 番になりますが、EBPM 研究会ということで、修了生と共に科学に基づく政策により、地域社会をよりよくするという理念の下に月 1 回ベースで研究会を行っております。
目的としては、科学的手法、特に政策強化での因果推論の修得・実践とか、研究者ニーズ、社会ニーズの両立した研究の実施、地域における EBPM の可能性と課題の検討ということで、実務的な目的と研究というところの目的を実際に修了生と一緒に達成しようということで取り組んでおります。宜しくお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
はい、ありがとうございます。
以上が、まず資料 1 の前半についてのご説明となります。ここまでのところで、まずは識者の方々のご意見を頂戴したいと思います。では、半井議長、宜しくお願い申し上げます。

【半井　真司　委員長】
それでは、ここまでの説明、特に第 4 期中期目標中期計画及び関連するアントレプレナーシップ育成プログラムに関する部分について、意見交換をしたいと思います。各委員の皆様には、短いのですが 1 人約 2 分を目標にご意見を頂ければと考えております。それでは私の隣の菅委員から、宜しくお願いします。

【菅　弘　委員】
感想ですけれども、私は今、百十四銀行で所管しておりますところが、地域創生部とか、コンサルティング部というところで、香川県の地域、地元に根差した地域銀行として経営課題、重要課題をクリアさせていくというところを所管しております。地域経済の活性化でありますとか、人生 100 年時代の対応とか、多様な人材、DX とか、持続可能な経営基盤という様なところが当行の経営課題として解決していくところでありますが、今、お話を聞いておりますと、やろうとしていることが私共の地域銀行として非常に重複している箇所が大変多くて、大変親和性の高い取り組みであろうと感じました。
我々も地域創生、地域があってなんぼという世界ですので、積極的に関与していきまして、こういった学生の皆様の人材育成に積極的に配することを意識していきたいと改めて感じました。すみません、以

上でございます。

【半井　真司　委員長】
　何か、今のご意見に。

【中村　正伸　研究科長】
　ありがとうございます。私共単に理論的なものだけではなくて、実践というところでいかに成果を挙げていくのかというところを意識して、学生の指導に当たっています。なかなか成果になるのも時間がかかるものが多いのですけれども、そこのところは修了後も今回サポートする仕組みもどんどんできてきていますので、そういうところで長く修了生、現役だけではなくて修了生とも関わっていきたいと感じているところでございます。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
　よろしいでしょうか。はい、どうもありがとうございました。
　次は、髙濵委員、お願い致します。

【髙濵　和則　委員】
　中身そのものと言うよりも、我々が今、本当の意味で一番課題と言いますか、避けて通れない部分がどうしてもございます。それはもうご承知の通り、人が採れない。人がいないという方が正しいのか、人が採れないのが正しいのかは別にして、やっぱり人材、人手不足、同等なんですけど、人材が不足していくのは昔からずっと変わってないんですが、今は人までいないみたいになっています。
　それぞれがいろいろなところで、私も観光協会の方もやっていますけれども、一体何を切り口にやっていったらいいんだろうかというのが本当にキーになっている。それは何かというと、そこに人がいないんですね。
　例えば、観光客に来て頂きたい。一生懸命やっているんです。来るときには、来年は典型事例になると含みますけれども、瀬戸芸と関西万博が一緒になりますよね。ドーンと来るわけです。もうオーバーツーリズムを超えてしまうという状況がたぶん発現するんだろうなと。だったら、今できることって何なのか。あまりにもギャップが大き過ぎて、ちょっと考えられないという様な現実が今、起こっています。
　ですから、一番、それでも何をやらないといけないかというのは毎年、今年も香川大学の生徒さん、来て頂いています。来年も数名来て頂ける予定になっています。予定ですけどね。そうやって一つ一つ、一人一人、現役の子、そしてもう一つは、OB 含めて、社会人、一体何をコンセプトに教育をして頂くのか、また一緒に考えてもらえるのかというところをもう少し具体的にちょっと絞り込まないと、もやっとした中で、先程の話ではないですけれども、来年、大変やろうな、これ、人いっぱい来たらどうやって対応するんやろうみたいなところだけは、全員思っているのですね。具体的に言うと、それぞれ、ああ、人が足りません。結局、できない理由はものすごく明確になっています。やりたい、やれる、ここのところをもう一度、今できることを中心に是非お願いしたいというのが一つの大きな私の今日の目的でございました。
　申し訳ないんですが、知恵があまりないものですから、皆さんのお知恵を拝借しながら、具体的に一つ

ずつでいいですからやっていかないと、来年だけの問題と違いますので、是非こういう大きなチャンスのときに、何が本当に一番キーなのかという様なところを是非指導頂きたいし、我々の社員も頑張ってほしいなと思っているですけれども。

ということで、ちょっと長くなりましてすみません。宜しくお願いします。

【半井　真司　委員長】

ありがとうございました。産業界からの実務的な要望ということだと思いますが。

【中村　正伸　研究科長】

なかなかにわかに回答ができないのがもどかしいところではあって、これは先日もお邪魔した際に会長の方からもう切々とご説明を頂いて、これは本当に深刻だなと思いを改めてしております。

やはり特に若い女性が出て行ってしまうというのは、すごく深刻だなと私も思っておりまして、例えば、求人の仕方なんかでも、これはちょっと学生にも話したのですが、ただ事務職とか、経理とか言っちゃうと、たぶん女性にあまり響かないと思うんですね。もうちょっと、ある意味キラキラワードなんですけれども、何とか企画とか、何とか管理とかするだけで、そこの名前でこういった仕事を期待していますよということをアピールしていけば、まだ考えてもらう様な機会は出てくるのかなと、ちょっとこの週末考えたところではあります。

ちょっとすぐに答えは出ないのですが、そこは教員一同、非常に深刻な問題があるという認識は皆さん持っていますので、そこはまたいろいろと意見交換して頂ければと思います。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

どうもありがとうございました。

それでは、竹内委員、お願いします。

【竹内　麗子　委員】

竹内でございます。非常に時代の変化のスピードが、駆け足どころではなくて、もう全力疾走みたいな変化の仕方をしてきている中で、私ごときがこれをああしてということは非常にもうおこがましい年代になってきたんですけれど、いつも自分の活動していく一つのライフテーマとして、女性が働いて、そして自分らしく生きていける様な環境の育成に頑張ってみようということでやってまいりました。

本日、創発科学研究長の関東への就職率が 50%、これは本当に香川県だけでなくて、都会を除くローカル圏はほぼみんなこういうパーセンテージを悩みに挙げて闘っている様な気がします。特に、今まで女子学生たちは、自分たちの人生とかそういうものを少々押さえつけられていた時代が長うございましたので、ここへきて卒業生は香川大学もほぼ香川県内で就職するよりは、この若い時代を世界の東京で就職して勉強して、うまくいけば国外にも自分の就職先を探そうという女性が非常に増えて参っております。

私の事務所は、ちょうど高松駅からこの香川大学へ来る生徒さんたちの通学路になっているのですが、朝の通学時間、それから下校時間の生徒さんの数の膨大さというのは、すごいです。もう南北、自転車と徒歩で登校されたり下校されたりする方は、もちろん JR さんをご利用なさっているので、全て県外の学

生さんです。県内の学生さんは、そういう面では自分の所から自転車とか公共交通利用で、電車ですね、ことでんとかそういうのを使っていらっしゃいますので、あまりそんなに際立っては見えないですけど、本当にうちの事務所の前あたりは、ここで学生向きの何とかをしたら儲かるんじゃないかなと思うぐらいすごい人数で、この人数がほぼほぼ香川県にはもう定着せずに県外へ出て行くんだということを前提にもう考えなければいけない時代が10年ぐらい前から始まっていたのに、行政も大学も経済界も手が打ててないと。傍観している間に、若い女性達は先程先生が仰った様に、東京へ出て行って、東京へ出て行ってどうなるかというと、結婚しない、そして、子どもを持たない、自分の人生を生きるという様な時代に入っていますから、これはどこから変えていかなければいけないかというと、やはり企業風土、それから社会風土、家庭風土、この3つの風土をどういうふうにして産学官がタッグを組んで考えていくか、実行していくかという、そこにかかっているかと思います。

置かれた所で頑張るしか仕方ありませんので、可能な限り、そういうことに対して提言と活動を、この通り、絞っておりませんので、声も出ますので、声が出る限りは頑張っていこうと思いますので、引き続き宜しくお願い致します。

【半井　真司　委員長】

どうも、あまり声が出なくて申し訳ないです。

非常に重要な課題で、ちょっとこの場の議論というよりは、より経済界とか、大きな枠の中で議論していかなければならないと思います。しかしながら、学校側にもそれなりにご検討も頂きたいと思いますが、何か一言ございましたら。

【中村　正伸　研究科長】

非常に深刻だなというのは感じているのですけれども、研究科としては、女性の学生が増えてきています。だいたい3分の1ぐらいが安定的に女性になってきていますので、これは明らかに増えています。そう考えてくると、もちろん中には独身の方もいらっしゃいますし、お子さんが2人もいて、下が小学校に上がったから来ましたなんていう方もいらっしゃるわけですね。そういう方たちが自分たちのライフステージの中でタイミングを見つけて、いつでも来て勉強したいなと思ってもらえる様な環境づくりは、学校としては刺激していかないといけないなと思っていますし、そのために必要ないろんな取り組みですとか、或いは、情報発信は引き続きしていかないといけないなと思った次第であります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

大きな議論、ご提案ありがとうございました。

それでは、白井委員、お願い致します。

【白井　久司　委員】

この地域マネジメント研究科のビジョンの地域活性化、それから、アントレプレナーシップの育成プログラム、これはもう書いている通りで、これ以上のことは何があるんだ、何をやったらいいんだというのは、ちょっと思いつかない。MBAのプログラムとしては、もうここに書いてあることをブラッシュアッ

プしていくぐらいかなと思っています。

一つ言えば、地域課題解決の先進事例の調査研究とかって、事例調査というところでいろんな所に行って見て、そこで見てきたものを見聞を広めてどうしたらいいかというのを考えさせる。そういうものをもう少し幅広くやっていったらいいのかなという気はします。

地域活性化には何が大事かというと、もう何を言っても一番に来るのは、そこで働いてそれなりの収入を得る職場、会社があるという、それに尽きるわけですけれども、それも育てない、育てるとか、どこからか誘致してこない限りは、活性化なんてとても難しい。インバウンドで観光というのは、もう誰しも思いつくことで、それをやったところで一過性で終わる可能性だってあるわけです。

やはり、根っこのところは地元で、熊本の菊陽町のことを言うつもりもありませんけれども、あそこは汗もかかずに勝手に台湾の企業が進出してきて、人がどんどん集まってものすごく活性化ということになっていますけれども、ああいう感じの何か新しい起業家を育てる様な教育プログラムを充実させていく。この書いてある通りでやっていくしかないのかなと思っています。

我々も、会社の方も、地域課題解決のための新規事業って何かないのかということでいろいろ取り組んでいますけれども、これは非常に難しい。我々の会社の立場から言うと、エネルギー自給率が日本の国の最大のウイークポイントだし、2番目のウイークポイントは食料自給率が低い。これも何とかしないといけないだろうということを考えると、再生可能エネルギーでコンパクトシティーを造って、インフラの更新投資みたいなのをうまくやっていく、財政に負担を掛けない様な絵を描いていくということになるんですけど、何せ足の長い話になって、なかなかすぐさまどうこうというのはできませんし、民間の企業でいくと、やっぱり収益性がものすごく低くなってしまう。低くなってしまうので、おのずと会社の利益を上げるためには海外で稼いできて、国内の所で地域の所で、利益率は薄いんだけれど、何かのお役に立てることはやっていこうかなというのが今の現状なんですけれども、そういうことを我々というよりも、若い方が全く違った発想でもって新しい起業をして頂いて、地域に働ける職場をつくっていく。そういうふうになればいいなと思っています。以上です。

【半井　真司　委員長】

はい。今の件、いかがでしょうか。

【中村　正伸　研究科長】

はい、ありがとうございます。正にお話し頂いたことは、MBA的なところで我々が考えないといけない本当の真正面のテーマかなと思ってお聞きしていたところであります。

ちょっと私が思ったのは、四国電力さんの様に大きいところは、もうどんどん大きいところでやって頂ければいいのかなと正直思ったところもありまして、やはり地元の中小企業できちんと根付いたところを育成していきたいなという思いも、私にはあります。そういう中でいろいろな取り組みを、彼らも100 人ぐらいの会社だとしても、今のこのタイミングでいろいろな経営の高度化を図っている様なので、そういうところを少しサポートしてあげたいなというところもありまして、そういうところが地元の就職先の魅力あるところになっていけばいいのかなと思ったりするところではあります。

もちろん四電様に頑張って頂く必要はあるんですけれども、そういったところも MBA として何ができるかというところはちょっと考えないといけないと思っているところです。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
　どうもありがとうございました。
　それでは、大山委員、お願い致します。

【大山　智　委員】
　県の方から毎年 1 名ないし 2 名を学ばせて頂いてありがとうございます。彼らにいろいろ聞いてみました。どう思っているのか、どうだったのかというのを聞いてみたところ、みんな共通して、よかったと。学べてよかったというお話でした。
　では、何がよかったのかということですが、4 点程あります。1 点目は、同世代の企業に行かれている方、役所に行かれている方と同世代の人といろいろ触れ合っていろんな考え方を聞くことができたというのが 1 点目。2 点目は、要はトップの方のお話を聞く機会があった。ここでいえば髙濵会長であったり、半井相談役の様な方の、トップの方のトップの視点でのマネジメントの話を聞くことができたのは非常に貴重であったということです。3 点目は、いろいろ研究をする中で分析手法等を先生方に教えて頂いたというのが非常にためになったということです。4 点目が、今日の先程のお話でも思ったのですが、修了後も繋がりを持てる点です。うちの県庁の方からは、選抜試験をした上で出しているのですが、確かに他のルートの場合も繋がりが全くないわけではないのですが、やっぱりいろいろな仕事をする上で、その繋がりが活かせるというのは、やっぱり香大の地域マネジメント研究科が一番だなというふうに私は思っています。その様な意味で非常にありがたいし、今後も地域マネジメント研究科の方に派遣したいと思っています。
　具体的に見直しする内容というのは、すみません、思いつきません。以上です。

【半井　真司　委員長】
　お褒めの言葉が続いたようです。

【中村　正伸　研究科長】
　ありがとうございます。MBA として派遣を頂いた以上は、学んだことを所属元に戻った後に活かして頂いて、仕事で活躍して頂くと、一つの MBA としての成果だと思っておりますので、そこのところは、現役時代から現役生も修了生も含めて適宜フォローは続けていきたいと思っているところであります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
　どうもありがとうございました。
　次は加藤委員、お願い致します。

【加藤　昭彦　委員】
　説明ありがとうございました。毎年なんですが、本当に熱心に多分野にわたって活動されているなというのが率直な感想です。

私は、説明して頂きました5つの取り組みのうち、3つ目の地域課題解決についての事例調査なりプログラム開発、ここに非常に関心がありました。1点目の海士町は、以前から結構注目をしている取り組みがありまして、ずっと追いかけたのですが、最近ちょっとなかなか調べられてないのですけれども、先程お聞きすると、そういった取り組みをまだ継続しているということなので、改めて調査なりをしてみたいと思っています。

それと、2つ目の丸亀の広島とか本島といった離島での取り組みですけれども、高松市としてもより深く関わっていきたいと思いますので、何かそういういい機会があれば、またお手伝いをさせて頂きたいと思っています。

5つ目の取り組み、修了生を中心のエコシステム創りの最後でEBPM研究会というのがありますけれども、うちの職員も関わっているので、ちょっと話は聞いたことがありますが、非常に有意義な取り組みだと思いますので、その成果を情報共有できる様な仕組みがあるのかもしれませんが、そういうのがあればいいのかなと思っていますので、その点、宜しくお願いしたいと思います。以上です。

【半井　真司　委員長】

どうもありがとうございます。これについてお願いします。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。やはり我々としては、実際現場でどういうことが起こっているのかということをとても大事に考えておりますので、そこのところの距離感というのは常に詰めて、いろんな見方、現実を見ていきたいなと思っているところではあります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

どうもありがとうございました。

次は松永委員、お願い致します。

【松永　裕己　委員】

はい、ありがとうございました。いわゆる通常のプログラム、授業以外のところで非常に戦略、ビジョンをしっかり定められて、新しいことをやられているなと、うちはまだまだ足りてないなというふうに話を聞いていました。

2つ教えて頂きたいのですが、1つは④⑤のあたりの修了生に向けた新しい学ぶ機会を提供するというあたりは、ビジネススクール全体としてシステム的に募集かけて、或いは繋がりを作ってやられているのか、或いはさっき三好先生から非常に難しい試験にパスしたという話がありましたが、例えば、三好先生が自分のところのゼミ生に声を掛けてみたいな、個別的にされているのか、そのやり方を少し教えて頂ければというのが1つ目です。

もう1つは、全体的に、例えば1番のアントレプレナーは各大学やっていると思いますが、最近よく目標設定しろとか、KPIを作れと言われて、KPIを作ったら作ったでいいんだけど、何か形だけKPIをちゃんと達成しないと後で怒られちゃうので、作ればいいという話ではないんだけど、作らないのは作らないでまずいという、その辺の目標設定をどうされているかというところを教えて頂ければと思います。

2点、すみません、ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
ありがとうございました。では、今のご質問に対してお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】
1つ目に関しては、研究科全体として修了生の名簿を管理しておりますので、そういったイベントごとの前に、かなり前のタイミングで情報公開はして、もちろんホームページなんかも使うというところなので、もうちょっと洗練したやり方をやりたいとは思ってはいるんですけれども、一応研究科として取り組んで全体に向けて修了生に投げ掛けて発信していますよというのが、まず1つ目のところです。
2つ目のいろんな、特に授業外のプログラムに関してのKPIの管理は、今回、全体としてそもそも第4期の中期目標中期計画で動いていますので、かなり学校から明確にKPIを決めて管理をされています。
プログラムで一番難しいのは、やっぱりプログラムをやったはいいけど、参加者はどれぐらいいたのかとかいうことをチクチク言われてしまうわけですね。残念ながら授業計画作成編としてしまうと、あまり面白くなさそうなに見えちゃうじゃないですか。そうすると、どうしても限られてしまう。ただ、その参加される方はとても優秀で、やる気があって、地元の大きな会社さんからも来て頂けるので、やったらやったで意味があるとは思っているんですが、その一方で、もうちょっとキラキラした、例えば観光コンテンツとやると人がいっぱい来てくれますので、そういうところをうまく組み合わせて、全体としてこんなことをやっていますよというところをうまくしていけたらいいかなと思ってやっているところです。
三好先生の方から補足ありますか。三好先生、お名前が挙がったので、金融関係のお話で。

【三好　秀和　教授】
サーチファンドについては、前から海外の MBA で始まった制度で、日本にもやっと定着してきたという中で、地元の百十四銀行様も力を入れているということもあって、これは我々MBAの資格を取った者は是非聞くべきであろうと。それだけではなくて、その元になる事業承継がどうして困っているのかというところを、ここは信用保証協会様のアンケート調査で香川の現状を言って頂いた中で、説得力のあるという。それと私の授業で中小企業ファイナンスと事業承継という科目自体があるので、これが一定数、学んでおりますから、そういうこともあって、大変アンケート調査の結果もよく、実際にサーチファンドに応募したいという方も 2 名ぐらいいらっしゃったのですね。だから、これは授業は継続的にやるので取り上げていこうということが一つあります。
それと、111ページのところで、金融セミナーをやっているんですけど、それは経済学部、法学部とも連携をしておりまして、全学の中で金融人材というのをしっかりと育てると。それは、香川大学は高松高商という古い伝統のある、経済には有力な人がたくさん出た大学ではありますので、そこのところをもう一度復活したいという思いがあり、ずっと継続しているものであります。
やっぱり意識がないと、高みを見せないと、学生というのは小さい世界の中で、簡単に言うと公務員になりたいという人がだんだん増えてきている現状が香川大学にもあります。そうではなくて、やっぱり稼ぐ力、世界の中でどうなのかというところを、例えばカーボンニュートラルなんてもう今すごい話題

の問題なので、そういった問題をこの前は BNP パリバの社長の土岐さんを呼んで実際に話してもらうということをやると、やっぱり一定数の方は反応するので、やはりアナリストというのを難しいけど取っていこうという機運になる方も何人かいらっしゃるので、そこにはちゃんと水を与えるということをやっていこうということでやっています。すみません、長くなりました。

【松永　裕己　委員】
　ありがとうございます。

【中村　正伸　研究科長】
　ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
　はい、ありがとうございました。
　それでは相川委員、お願い致します。

【相川　恵祐　委員】
　ご報告ありがとうございます。5 つの計画に向けた取り組みなんですけども、研究課程ということもあるかもしれませんけど、報道機関の方に情報提供されているうちで、県民リテラシーの教育なんかは情報提供されたと思うんですけど、されていないことがちょっと多いのかなと思いました。
　やっぱり報道されることで新しい協力が生まれたり、読者とか視聴者から新たな視点に基づく意見が得られる可能性が高いので、なるべく報道機関なんかとも情報共有しながら進めて頂くといいのかなというのが 1 点です。
　もう一つは、この 5 つの計画の前提となっている社会的背景ですよね。8 ページの下の図を見ますと、その前提となっている社会的背景として、少子高齢化とか人口減少、コロナ禍とあります。少子高齢化とか人口減少というのは当時から共通した課題ではあるんですけど、ちょっと先を見ている課題なんですよね。コロナ禍というのはもうないです。そういう中で、先程、髙濵委員が仰った様に、今はやっぱり企業は人手不足で事業を続けることができないとか、或いは物価高で我々生活者は生活できないとか、もう緊急課題と言える様な課題が今は出ている中で､必ずしもこの 5 つの計画でいいのかという見直しは、私は柔軟に考えた方がいいのかなと思います。髙濵委員は絞り込むことが必要だと言いましたけども、私はこの計画自体でいいのかということも含めて、本当に柔軟に考えた方がいいのかなと思いました。
　大学研究機関というのは、非常に知恵というか、知の宝庫でもあります。AI にばかり頼る必要はないと思いますので、そういう皆さんのその知恵を活かして、今の直面している課題の解決に対するご提案を頂くというのはすごくいいことだと思いますので、ご検討頂ければと思います。以上です。

【半井　真司　委員長】
　ありがとうございます。では、大学側から。

【中村　正伸　研究科長】

はい、ありがとうございます。緊急性が高い課題にどう柔軟に対応していくのかというところですね。我々はプログラムの中身に関してはちょこちょこ、実は毎年変えていっていまして、とは言っても、我々もお客さんを集めないといけないというのがありまして、プログラムをちょこちょこ変えたいというんですけれども、もちろん彼らの中で課題認識がありますので、今お話し頂いた様な現在の経済状況たとか、人手不足を前提に課題意識を持って入学してくる学生、プログラムを取ってくる学生もおられます。そういった方々と実際何に困ってるのというところは少しまた議論しながら、プログラム化していければいいかなと今思った次第です。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

よろしいでしょうか。

はい、それでは最後は私の方から申し上げたいと思います。今の松永委員並びに相川委員のご意見とちょっと近い様な話なんですが、今年が中期計画の 3 年目、折り返しの年になるということですが、通常、企業で言えば、中期計画を作った場合に、やっぱり KGI、KPI を明確に出すんですよね。何を、どの項目を KPI に据えるかどうかというのはあるんですが、毎年、その達成度合いをしっかりと検証して、時代の環境に合わせてそれを翌年度、変化していくということを行っているわけです。

そういう目で見た時に、この中期計画というのが、ちょっと何を目指しているのかが曖昧で、一生懸命いろいろプログラムをやっておられるのは分かるんですが、かなり有効なこともやっておられるのは分かるんだけれども、やっぱりその成果、或いは目標というのがちょっとぼやけている様な感じがするんですね。

大学内できっちりとそういう検証をやっていると言うならば、できればこういう連携会議の中でもお示し頂いて、今、こういうことをやっている、或いは PDCA を回して去年の内容を今年はこういうふうに変えているというのをちょっとお示し頂いた方が、委員の皆さんも分かりやすいのではないか。

先程、相川委員並びに竹内委員が仰った様に、時代の流れって速いんですよね。6 年前に企画したものが、もう終わりの年にはあまり意味がないものになっている可能性もあるということもあるので、是非その辺のやり方を、やっているというなら結構なんですが、考えてしっかりと、より効果的なものを作って頂ければありがたいなというふうには思っております。以上です。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。こちらも目標と成果の管理というのが 1 つ目だと思うんですけれども、学校自体も何をしたかではなくて、どういうプログラムをやったかではなくて、ちゃんと成果報告をしろということを去年ぐらいからかなり強く言われる様になってきています。その一方で、教育機関でもあるので、人の育成というのは時間がかかるというのもあると思いますので、その辺に関して今少しバランスを取って、どういうふうにやっていくか、或いは、打ち手に関して、ちょっと時間がかかる様な取り組みと、割と少し 1 年ぐらいで成果が出る取り組みとを分けて考えてもいいのかなというところです。私も管理会計が専門ですので、中長期で見る目線と短期、1 年で見る目線をちょっと分けて何か取り組みを考えていくのも考えないといけないかなと今思った次第です。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

はい、どうもありがとうございました。それでは前半の意見交換は以上とさせて頂きます。それでは、中村研究科長から引き続き、ご説明をお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】

ただいま、貴重な意見を頂いて恐縮ですけれども、残りの説明させて頂こうと思います。

また資料に戻りまして、目次として先程、修了生中心のエコシステムの下の方、「経営系専門職大学院認証評価について」というところのご報告になります。

ページをおめくり頂きまして、大きな数字で 12、小さい数字で 23 というところになります。こちらは、認証のお話をしたんですけれども、2023 年度、文科省の外郭団体であります大学基準協会の第三者認証評価を 5 年ぶりに受審して、まあ問題ないということで認定を頂いております。

今回、一番きついのは是正勧告、これは法令違反になるのですぐにやらないといけないのですけれども、そういう項目はなくて、今回は検討項目としていくつかあるよ、特色もご指摘頂いたんですけれども、プラスして、検討課題もいくつかあるよね、これはちゃんとこの後取り組んでいってくださいねということで指摘頂いております。

特色に関しては、地域というところに特化していますとか、コンペといったものをずっと継続してやっているというところですとか、めくって頂きますと、先程ご紹介頂きましたけれども、いろんな企業経営の方ですとか、官庁、自治体の方々に来てもらう授業も 3 つ揃えていますよねというところですとか。或いは、我々教員が 2 人ぐらいで学生を 5、6 人面倒見ますので、そういったきめ細かいところがとれていますねというところは、いい方として指摘頂いたところです。

一方で、検討課題もいくつかありますので、そういったところに関しては、今日賜った意見も踏まえて、どういう議論をしていくのかというところを含めて、今後議論をしていきたいと思っているところであります。ちょっと簡単なご紹介となります。

最後の今後の課題検討というところで少し資料 1 の最後をお話しさせて頂きます。今日のお話も踏まえないといけないんですけれども、まず項目として大きく 3 つあると考えていまして、アントレプレナーシップ教育をやるのはいいんだけれども、その成果という点でどう、これから大きくしていくのかというところは一つあるのかなというところが、今日の議論も踏まえての思っているところであります。

また、そういったものを受けまして、授業科目ですとか、いろんなプログラムを継続しての見直しもやはりしていかないといけないんだろうというところが 2 つ目です。

それから最後が教員組織、我々も多様性が必要と思っていますので、多様性にこだわった教員組織の維持改善というところです。こちらに関しましては、今後、先生方が定年退職の方が続きますので、そのタイミングで授業のカリキュラムなんかも含めて教員の組織のあり方も今後検討していきたいということで、今、検討項目として考えているところになります。

以上が資料の 1 番のご紹介でした。この後、引き続き、お手元の資料を見て頂きたいと思います。まず資料 2 というものがあります。これは修了生、在校生の勤務先のリストと細かいものを付けさせて頂いております。ちょっと中身は割愛させて頂きます。

資料 3 番が、今度は入学状況です。2023 年度の状況をお付けしています。先程お話しした様に、女性入学者が増えてきているところは、流れとしては定着してきたかなというところになります。

資料の 4 番が先程お話ししましたリカレント専門講座の分厚い資料を付けさせて頂いております。こ

れはまた後程見て頂ければと思います。

資料 5 番が外部資金の受け入れ報告のものですとか、資料 6 番は、先生方の外部での講師とかのお役目のところです。外部委員の話も纏めさせて頂いております。

資料 7 番が修了式、修了式・学位授与式の様子になりまして、資料 8 番が専門職大学院の一覧ということで付けさせて頂いております。

ここまでが資料 2 から 8 まで簡単に全般の情報としてお話し致しました。

ここから、少し教育活動のお話をして参ります。資料の 9 番から教育活動の話をさせて頂きます。まず資料 9 番は、授業評価アンケート。年度末に修了生から、年度の期中と、あとは年度末に採ったアンケートになるんですけれども、こちらのご紹介を長町先生、お願いできればと思います。

【長町　康平　准教授】

はい、授業評価アンケートは 2 つあります。前期に開講している科目、それから夏を中心に集中的に開講している集中科目、これを纏めたものと、それから、後半の方では後期に開講している科目、それぞれ分けて集計をしております。

いずれもウェブのアンケートという形で実施しておりまして、詳細な結果はまたお時間のあるときにご覧頂ければと思いますが、満足度という形で授業全体の満足度をお聞きしていて、概ね肯定的な回答、9 割弱の肯定的な回答を頂いております。それ以外にもいくつかシラバスの内容や授業の教え方等についても聞いておりますが、似た様な傾向があって、課題の量、質のところでは、結構重たい課題が出たりするので、そこの肯定的な割合は若干低いのですけれども、概ね肯定的な回答を頂いております。

それから、授業の満足度と授業の内容が理解できたかどうか、それから講師の説明が分かりやすかったかどうかというところの間に、すごく強い正の関係があって、分かりやすい授業で理解を促すことで満足度が高い、そういう傾向が見られた結果になっております。以上になります。

【中村　正伸　研究科長】

はい、ありがとうございます。

続いて資料 10 番になります。そちらが修士論文の代わりに学生に書いて頂いておりますプロジェクト研究の一覧となっております。ざっと見て頂くと分かると思いますけれども、非常にテーマが多岐にわたっているところが特徴かと思います。地域のこともそうですし、或いは企業の中身のことも、こういった様々なテーマを学生が自ら選んで取り組んで、2 年生のときにこういったプロジェクト研究、修士論文として纏めていかれるというのがずっと続いております。プロジェクト研究のご紹介でした。

続いて、資料 11、12、13 が「四国経済事情」の 3 科目になるんですが、1 つのみ触れさせて頂きまして、資料の 13 番、「四国経済事情（地域活性化と企業経営）」について、西中先生、説明お願い致します。

【西中　美和　教授】

資料は 94 ページになります。「四国経済事情（地域活性化と企業経営）」は、地域活性化に関して企業経営の視点から考察するという授業です。四国における代表的な企業、或いは四国に本社のある、ある特定分野における世界のトップ、また日本のトップの企業の経営陣の方から、それぞれ講義を頂いております。経営理念や経営戦略に関して講義を頂いております。

先程、大山様から「トップの話を伺うことができてとてもよかった」というコメントを頂いておりますけれども、私も同様のコメントを受けておりまして、「この授業を履修できただけでも地マネに来たかいがあった」という学生のコメントを頂いております。

ご担当頂きました企業様におかれましては、誠にありがとうございます。四国電力様、大倉工業様、JR四国様、百十四銀行様におかれましては、本当にありがとうございます。また今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

【中村　正伸　研究科長】

はい、ありがとうございます。続きまして、資料の 14 番になります。「合宿」について、板谷先生、宜しくお願い致します。

【板谷　和彦　教授】

はい。合宿の説明、ページ数 95 になりますけれども、去年、神山町に 5 年ぶりに学生、教員と共に行ってきました。地域活性化の先進事例ということで、神山町は大変有名でございますけれども、町全体を大南さんというキーパーソンを中心として様々な IT、映像メディア関係の企業を誘致、それから、関連する NPO を立ち上げたさまを、みんなで認識してきました。

トピックスとしては、神山まるごと高専という若者をまるごと教育してしまう。しかもエンジニアリング、アントレプレナーの教育をしてしまうというものを作ってしまったということで、深くは見えなかったのですけれども、そういう雰囲気を大変刺激に持ち帰ってきました。是非そういう若い人が四国に住む様な形で我々も働きかけができていけばと思います。以上です。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。続きまして資料の 15 番、こちらは公開の授業ですが、「地域の中小企業と経済活性化」、につきまして、島根先生、宜しくお願いします。

【島根　哲哉　准教授】

「地域の中小企業と経済活性化」は、かがわ産業支援財団にご協力頂いて入っている科目で、地域の中小企業の経営者の皆さんにお話を頂いている講座です。経営者の皆さんがどの様にそれぞれの会社の課題に取り組んでいるかということに留まらず、地域のためにどういった活動をされているかとか、また、若い人に向けたメッセージも伝わってきて、とても刺激的で、昨年度は受講者もたくさんいて、大変盛況な状況でありました。以上です。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。続きまして、資料 17 番「ケースメソッド研究会」について、吉澤先生、宜しくお願いします。

【吉澤　康代　准教授】

ケースメソッド研究会は数年にわたって実施しておりますが、授業科目ではなくて、学生が手を挙げ

てやりたいと自主的に参加をして頂いて、ケースメソッドの教授法を学びながら、ご自身で直面している課題をケースに仕立てて、ケースの発表をしていくという流れで実施しております。

学生の抱えている課題が明確に解のあるものばかりではなく、解のないものが非常に多くて、そういう課題について、ケースに仕立てて多面的に議論を重ねながら、解がないのでどう対応していったらいいんだろうかということを考えて頂く様な形になっております。

ここのところ、数年やっておりますけれども、昨年との違いとしては、学外からのご参加があったということです。岡山大学の先生とか、あと、本研究科ではなくて経済学部の先生とか、そういう方にもご関心頂いて参加頂いたのは、昨年ちょっと目新しいことだったかなと思っております。以上になります。

【中村　正伸　研究科長】

はい、ありがとうございます。以上が教育の内容とさせて頂きます。

少し飛びまして、資料 22 番からになります。ここからが社会貢献、イベント、広報等について、資料の 22 番にお進みください。

22 の資料は、これは私共が毎年やらせて頂いております「香川ビジネス＆パブリックコンペ」です。授業提案ですとか、政策提言というところでプランを募集致しまして、コンテストをやるというところでございます。今年また 11 月 30 日に開催予定しております。ありがとうございます。

そして、続きまして資料 23 番になります。こちらが JA 香川県さん向けに私共がやらせて頂いているビジネス研修になりまして、これは事業提案に最終ゴールを向けまして、その前段としていろいろ経営学を学んでもらって事業提案をしてもらうというところを続けてきております。この研修は今年も一応開催予定となっております。

そして、資料の 24 番になります。こちら 24 番に関しましては、学生のシンポジウムになります。入学してもらった 1 年生に自らテーマを選んで頂きまして、いろんな取材をしたり、ゲストを呼んでシンポジウムをやらせて頂いております。昨年度は第 20 回というところで、「かがわ観光のサスティナブルな未来」というテーマを設定し、学生が取り組んでくれたということになっております。

めくって頂きまして、資料 25 番に参ります。「リカレントプログラム」、これが対 OB というところで毎年やっているものになるんですけれども、5 月にいつも開催しておりまして、最近は、登壇頂く方について、修了生を中心にしてご講演頂いて、テーマ設定をしてパネルディスカッションをしてということを繰り返して OB の方に学びの機会を与えている取り組みになります。

資料 26 番になります。「プロジェクト研究公開報告会」、これを大﨑先生、お願い致します。

【大﨑　孝徳　教授】

はい、分かりました。3 月 9 日にプロジェクト研究報告会が開催されました。一般に優秀プロ研と言われます、各ゼミナールからとりわけ優秀だと選ばれた 1 つの発表、6 ゼミから出まして 6 つの発表と、あと修了生で構成される同窓会が評価した発表、計 7 つのプロジェクト研究が報告されました。当日は大山様、竹内様、松永先生にもお越し頂きまして、大変有意義なコメントを頂きました。以上でございます。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。続けてラジオのお話もよろしいですか。大﨑先生。

【大﨑　孝徳　教授】
はい。FM 香川におきまして、「ラジオで学ぼう！MBA 地域マネジメント研究科」というものを今年も放映させて頂きました。12 月 7 日から 2 月 29 日まで全 13 回、各 5 分ずつですけれども、資料 165 ページの通り、行わせて頂きました。以上でございます。

【中村　正伸　研究科長】
ありがとうございます。続いて資料 28 番になります。「ビジネススクールに行こう！」、説明会ですね。こちら島根先生、お願い致します。

【島根　哲哉　准教授】
はい。リクルート活動の一環として、説明会を修了生に同席してもらって夏、秋、冬、それぞれ 3 回から 6 回程度行っています。実際に来て頂いた方はその後、出願、また入学に繋がった例がとてもたくさん得られたので、十分成果は得られていると感じております。

【中村　正伸　研究科長】
よろしいですか。はい、ありがとうございます。説明は最後になります。資料 29 番「創発科学研究科との連携」についてです。これは板谷先生、お願いします。

【板谷　和彦　教授】
先程冒頭で紹介しましたけれども、2 年前に発足した創発科学研究科で、今年度、博士後期課程ができました。そちらに私も設置の準備に参加しており、地マネからも 4 名の先生が博士課程を指導するという立場で参画することになっております。今後、修了生、現役学生の進学を見込むところであります。
それがトピックだったんですけれども、2 年前から創発科学の修士課程、博士前期課程に向けても授業提供しておりまして、いくつかの授業提供をしておりますけれども、トピックとしては、「創発の実践」、これは吉澤先生が主担当されていて、次から資料がいくつか載せてありますけれども、これはアントレプレナーをストレートインの学生にも体験させるということで、創発科学研究科に我々のノウハウといいますか、アントレプレナーの教育を提供して、学外からの参加も見込んで、それから多様な先生、我々だけではなく、香川大学、オール香川で多様な先生の指導を受けながら、そのアントレプレナーの体験学習をさせる。こういったものが今年度 3 年目になりますけれども、去年度も実施したものになります。以上となります。

【中村　正伸　研究科長】
ありがとうございます。以上で説明を終わらせて頂こうと思います。
では、全体を通じまして、委員の皆様のご意見を再度頂戴できたらと思います。半井議長、どうぞ宜しくお願い致します。

【半井　真司　委員長】

はい、それでは、後半と致しまして、全体を通してご意見を頂きたいと思います。また各委員の方々、お一人 2 分を目途にご意見をお願い致します。
それでは、先程の逆回りで、相川委員から宜しくお願い致します。

【相川　恵祐　委員】
ご説明ありがとうございます。私は大学基準協会の評価の結果についてというところで感じたことをお伝えさせて頂きます。検討課題としていくつか指摘されている中身というのは、私が見た感じでは、結構、重箱の隅をつついた様な内向きというか、どうでもいいことが書かれている様に思います。皆さん、やはり解決に向かって検討は必要かもしれませんが、この検討課題に対する検討をするよりは、この特色として評価されたプラスのところをもっと伸ばして頂くことを考えて頂けたらいいなと思います。
12 ページにもあります、今もご説明頂きました香川のビジネス＆パブリックコンペ、これは非常にいい取り組みだと思いますし、学生のプロジェクト研究、先程タイトルの本文だけ見ましたけども、これもすごくいい研究をされていますので、こういったものにより力が行く様な体制にして頂きたいと。
それで、この課題研究は香川が中心にどうしてもなりがちだということがございますので、香川以外の 3 県にも目を向けて、四国全体の発展に寄与する様な研究を進めて頂ければなと思っております。私からは以上です。

【半井　真司　委員長】
はい、ありがとうございます。何かコメントは。

【中村　正伸　研究科長】
ありがとうございます。この認証評価につきましては、今回頂いた課題はあまり大きくなかったので、実はほっとしているところです。仰って頂いた様に、特色をいかに伸ばしていくのか、また成果を意識して取り組みをやっていくのかというところは、今後また先生たちとも検討していきたいと思っております。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
どうもありがとうございました。
続いては松永委員、お願い致します。

【松永　裕己　委員】
ありがとうございます。去年、プロジェクト研究の発表会に参加させて頂きまして、そのときもコメントしましたが、非常にレベルが高い研究がなされていて、しかも香川大のビジネススクールの特色みたいなものがしっかりと入っている。その辺を踏まえた研究ができているなと感心しました。
それと別に、通常の授業で授業アンケートを資料 9 に載せて頂いていて、これ、うちもだいたい似た様な傾向なんですが、少人数で社会人だとだいたいポジティブな意見がすごく多くなるんですよね。そうすると、ここからさらにどう改善していくのかというのが、この数字だけだとちょっともうこれ以上やりようがないじゃんみたいなところがあって、個別意見のところで先生方いろいろ改善策を練られてい

ると思いますが、その辺の授業アンケートの見直しだとか、或いは活用だとか、もうちょっと広げるとFD活動ですよね。その辺について何か今後こういう展開をしたいというのがあれば、教えて頂ければと思います。

【半井　真司　委員長】
はい、ありがとうございます。

【中村　正伸　研究科長】
ありがとうございます。FDを中心にというところだと思うんですが、FDはだいたい最近は教授会の後、2時間ぐらい取ってやっていますので、そこは時間をかけてやれる様な体制に今、移行しつつあるところであります。
仰って頂いた様に、授業評価アンケートの内容もそうですけども、質問項目も必要に応じて変えていく必要もあると思っていますので、例えば、自由記述欄をちゃんと設けたり、或いは、そもそも答えてもらわないと意味がありませんので、回答数を増やしていくというところも、若干、オンラインになってから下がったところもありますので、そういうところはちょっとフォローしていきたいなと思っているところではあります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
はい、どうもありがとうございました。
それでは加藤委員、お願い致します。

【加藤　昭彦　委員】
説明ありがとうございました。直接説明頂いた内容とは関係ないのですが、冒頭の中村研究科長さんからお話がありましたけども、香川大学の卒業生の就職先ということで、結構地元、特に法学部と経済学部辺りは地元に残ってくれる学生が非常に増えているという実感です。
市役所の方にも、本当に毎年、大勢の方に受験して頂いて、たくさんの方を採用させて頂いています。本当にそれは非常にありがたいことだと思っていますし、地元出身者だけではなくて、県外から来て、高松で 4 年間暮らして非常に高松の印象がよかったので残りたいという方もどんどん増えてきているという印象です。
と言いながら、高松市は、県も同じなんですけれども、やはり若者の世代が、人口構成から見ると本当にいびつな、非常に少ないということなので、何とかそこを増やしていきたいなと思っていますし、高松市まちづくりの計画で若者に選ばれる町をつくるという、非常に高い目標なんですけども、そういった目標を作って取り組んでいます。
若者に選ばれる町ってどんなのか、非常に多岐にわたるので、一朝一夕にそれは実現できないのですけれども、本当にいろんな試行錯誤をしながら、何とか選んでくれる町、東京に就職した人でも帰ってくる様な、そういった町をつくろうということで、今、県さんとも連携して取り組んでいます。また香川大学の方でもそういったところでお力添え頂けたらありがたいと思っていますので、宜しくお願い致します。

【半井　真司　委員長】
ありがとうございます。何かありますか。

【中村　正伸　研究科長】
これも前半からに引き続きですが、非常に大事というか、最重要課題という認識は我々持っておりますので、今後また是非、高松市さんのOBともいろいろ話をしてみたいなと思ったところであります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
はい、ありがとうございました。
それでは大山委員、お願い致します。

【大山　智　委員】
ありがとうございます。ここにも出てくるんですが、例えばプロジェクト研究、何回か、竹内さんと共に行かせて頂いています。かなりレベルの高い研究もあって、やはり香川県以外の地域の内容も含んで、いろんな研究がなされているなと、私も思っています。
ただ一方で、行政に関する研究の部分について、じゃあ、果たしてこの提案を実現化できるのかという視点で考えたときに、そこまでは無理だなというものが多いと正直思っています。せっかくここまで苦労したんだったら、もうちょっと実現性を考えて、突っ込んで、もう一つ突っ込んで研究ができないのかと実は思っています。今までも、最後にちらっとだけ申し上げているのですが、なぜ研究を最後に仕上げるときに、論文を考えるときに、県の担当課ともっと話をしないのかという思いがずっとあります。
そこは是非もう少し、せっかく地域マネジメント研究科ということでやって頂いていて、本当に私はありがたいのですが、もっと連携をできるところもあるのではないかと思いますので、そこはもっとずけずけ売り込んで、県の方にも来て頂いたりしたらありがたいかなと思います。以上です。

【半井　真司　委員長】
はい。極めて本質的な依頼だと思いますけども。

【中村　正伸　研究科長】
そうですね、はい。我々もプロジェクト研究を評価するときに、やはりきちんと実証実験したものであるとか、試しにやってみて成果を確認したものというのが、評価としては高い点数になることは、だいたいそうなっている研究も増えてきているのですけれども、やはり現場からご覧になられていて、もうちょっと突っ込めるところがあるんじゃないのというところは、その通りだなと受け止めて、そこはまた学生指導をどうやっていくかを考えたいと思います。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
はい、どうもありがとうございました。

それでは、白井委員お願い致します。

【白井　久司　委員】
感じたのは、今、副知事の方から言われたのと似ているんですけど、最後のプロジェクト研究報告のテーマの話になるんですけれど、学生の主体に任せてテーマ選定をやっているという格好なんでしょうけれど、この地域マネジメント研究科の目的というのは地域の活性化であって、要するにまちづくりの話に行き着くことになるので、テーマを例えば、いや、耕作放棄地がいっぱい増えているんだけれど、それをどうやって活用したら活性化に繋がるかとか、エネルギーの自給率を高めるためには何をどうやったらいいのかだとか、いろんな分野のテーマ枠をある程度用意した上で、この枠で何人か、そのテーマを選んで何かやってくださいとかという様に、大学側の方がある程度、テーマ選定のところで絞り込みというところに関与することも必要ではないかなと感じました。以上です。

【半井　真司　委員長】
これも極めて重要なことだと思います。

【中村　正伸　研究科長】
これはかなり研究科でも議論しないといけないポイントになるんですけれども、結果として学生の様子を見ていると、まあ、きちんとやって意味のある、非常に極めて本質的なテーマを選んで取り組んでくれている学生さんたちがほとんどなので、こちらでテーマとして、いや、そんなのやっても意味ないぞとは、あんまり言うことはない、結果的にはなってきていたので、何ともこちらとしてのテーマ出しをどうしようかなと、今すぐにはお答えできないなというのが正直な、今での回答になります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】
また、ご検討頂いてということになろうかと思いますけれども。

【中村　正伸　研究科長】
そうですねえ、これは。はい、分かりました。

【半井　真司　委員長】
ありがとうございました。
それでは竹内委員、お願い致します。

【竹内　麗子　委員】
今、テーマの絞り込みというご意見を頂いたんですが、地マネのコンペの審査員を長らくさせて頂いておりますと、そういう形でテーマが細分化してくると、非常に審査員は悩んでしまいますね。ただでも本当に悩ましい状況の中でグランプリを選ばせて頂いているんですけれど、最近思うのは、地マネの方の生徒さんも女性がどんどんと、我々も頑張って各企業に働きかけたり、それから後輩達に働きかけて、

地マネはこうだから、是非入ってみて、そしてそこで勉強して、新しい分野を開いてという形で進めていって、やっとここまで来ています。コンペの発表者も女性の発表者が増えてきています。そして、グランプリを取る女性の率も高まってきています。

こういう一つの流れを上手に育てて、いろんな、今、光が当たっていない様なところに光を当てて、地域をよくしていく方法を我々が探さなければいけないところですけれど、まだまだそういう面でも過渡期でございますので、しばらく本当に協力してやりながら見守っていきたいと思っています。大きな期待をしています。以上です。

【半井　真司　委員長】

はい、ありがとうございました。何かありますか。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。地域活性化と言われてもう久しいわけですけれども、我々のこの取り組みをやはり常にトライアンドエラーでやっているつもりではあります。うまくいく取り組みもあればそうでもないものもあって、ずっと継続して、プログラムを見直しながらやっているというところが実態であります。

我々も、もしかしたら先生方にはある程度答えがある方もいると思うんですけれども、私はまだ答えが見えないので、そういうところで言うと、いろんな取り組みを継続してやっていかないといけないのだなというのは、今分かっているところではあります。どうもありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

はい、ありがとうございました。

次は髙濵委員、お願い致します。

【髙濵　和則　委員】

今も話にあったんですけども、目的そのものが地域の活性化という大きいくくりになっています。私は丸亀に会社があるわけですけども、要は、どの様にやればここに定住してもらえるかというコンセプトで、大学生は、昔から大学生専用でリクルートや何やら一生懸命やってきました。だけど、どんどんどんどん採れなくなってきた。で、このままではどうしようもないということが一つの大きな課題になっていました。

数年前から、子どもたち、小さい子どもたち、これはたまたま丸亀キッズウィークというのをやっているんですけども、商工会議所からの依頼と言ったらおかしいですけれども、中四国では丸亀だけしかやっていないと思うんですけども。これを何でやったかというと、大学生は、先程言いました様に、会社が会社の人材として採るために一生懸命ターゲットにしてやってきました。一方では会社、丸亀にいる人は、高松にいる人は、そこは分かっても、高松の人が丸亀の会社ってそんなに知らないんですね。親も。これをどうやってやったら一番いいのかと。直近は大学生ターゲットでやるのが一番手っ取り早い。だけど、小さいときから刷り込みしたらええんちゃうかという発想なんです。それで今、5年目ぐらいになったんですけどね。それは保育所から中学生まで。

そして、その次、去年から何をやろうとしたかというと、高校生の文化祭を今年やったんです。これは高校生をターゲットにした。そして、この地域マネジメントは、一般社会人ですよね。ここもできる様になった。

だから、短期決戦ではなくて、幼稚園のときから会社見学。これは何の目的でやったかというと、働き方改革なんです。親と一緒に 1 日、子どもと遊びましょう、学びましょうという取り組みなんですね。我々の会社も、その日は、丸亀在住で子どもが中学生までの親は、全部有給休暇を取れと。今もやっています。毎年何十人、強制で休ませています。奥さんも休ませてくれ。それぐらいまで言って、まあまあ中讃で善通寺とか、そういう所も含めて協力してもらっています。

なぜそこまでするかというと、会社を知ってくれないと、親にも知ってほしい、小さいときから知って、高校生、大学に行って、帰ってくるときでも、高校時代に、ああ、こういうことやった、丸亀に住みたいねという思いを醸成しようというのでやっています。だから、時間がかかるかも分かりませんけども、もう 4、5 年前からそうやって下からやっていますから、あと 10 年もしないうちに、高校生になって、大学に行って帰ってくれる子が 1 人でも 2 人でも増えないかなと思ってやっています。

そして、一番の大学生のもう一つ上の社会人、うちの会社に来てくれという意味ではないんですけどもね、会社を知ってもらう。入っている人は知っている。そして、高校生もそうやって地元企業、どういう所があるか勉強する。小さいときから、ああ、船造っとる会社がある、こんなん造っている会社がある、要は、住みやすい町、子育てしやすい町というコンセプトもきれいな言葉でいっぱいあるんです。日経 BP でこれを言うと、ちょっと顰蹙を買うこともあるんですけど、中四国で丸亀は 2 年連続で 1 位を取っています。はい、以上でございます。

【半井　真司　委員長】

どうも。何か。

【中村　正伸　研究科長】

はい。この話もこの前、ご訪問させて頂いた時にご紹介頂いたお話で、小さいときからの取り組みがとても重要だなということは、私も認識を持っているところです。

一方で、私自身は転勤族の家だったものですから、小さいときからの刷り込みというのが、みんなが、例えば香川県の三木町出身で戻ってくるというのは、何かどういう感覚なのかなというところは、もうちょっとそういうところは聞いてみたいなと思っているところではあります。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

はい、ありがとうございました。

それでは菅委員、お願い致します。

【菅　弘　委員】

すみません、ちょっと誤解等があれば、また修正頂きたいんですけども、先程、企業、経済界からすると香川大学の学生が地元の企業に就職してくれないというところと、今回の MBA 地域マネジメント研究科というのは、実は、教育カリキュラムに全然連続性がないものであって、香川大学の 4 年生の間は、と

にかく企業の採用ランキングを、広島大学とか岡山大学よりも上回る様なランクを目指して、学生をまあまあ教育して、企業からのそういった高評価を得て、香川大学の評価も得たいという。一方で、ここの大学院に来る、地域マネジメントに来ると、いきなり地域活性化、地域マネジメントというところへ帰ってきて、そこへちょっと大きな違和感を私は感じています。

その中で先程発表のあった、創発科学研究科という大学院のカリキュラムで先程板谷先生と吉澤先生がそういったカリキュラムに参画して、こういったカリキュラムを設営されたというところを拝見して、正にそういったことを、我々は大学と大学院といったらもうほぼ同じじゃないかという目線でも、実際は違うという様な認識でいいのかどうなのかというところを教えて頂きたいのが1点と。

香川大学の、先程ありました、名称に「地域」が入っているビジネススクールはないということですけれども、これはなぜないのか。なぜ香川大学だけなのか。これは優位性があるのか、その辺をちょっともう一度教えて頂きたいと思います。

【半井　真司　委員長】

ありがとうございました。では、お願いします。

【中村　正伸　研究科長】

これもとても難しいところでは考えているんですけれども、大学から大学院にわたってのそういった連続性と言うのでしょうか、教育コンテンツとしての。そういうところは、大学の本部の方も、学部間連携ですとか、学部と大学院ということはあまり言われることはないんですけれども、ただ、そのプログラムというところで、我々も前期の1年生、2年生に教える様な科目も何年かに1回あるものですから、そういったところで手を変え品を変え、地域マネジメントでこういうことをやっているんだよという話は、してはいっているというのは一つあります。プログラムとしてどう連続性を持たせるかというところは、もう少し踏み込んだ議論が要るのかなと思ったところではあります。

マネジメントの中でも地域マネジメントということで言いますと、私はとても特色が出ていると思っていまして。他の MBA でも非常勤の教員をやっているんですけれども、要は、公務員の方と NPO の方と民間企業の方が同じ教室、同じ授業を受けて議論をしているなんていう所はどこもないんですね。そこはもう地域マネジメント研究科だけだと思っております。なので、まず、学習の場所として、一つ非常に特殊なものに今なっているというところです。

実際、志願者の方も一定数きちんと確保できているものですから、そこはやはり訴求力があるんだろうなと。要は、通常の MBA であれば、じゃあ、グロービスのオンラインでいいかなだとか、ちょっと遠いけど神戸の MBA に行こうかなというところが出てくるんですけれども、少なくともこの香川エリアですとか、或いは愛媛、徳島、高知含めて、或いは岡山も含めてというところで、地域とマネジメントの経営というところでやられているんですねというところは、特色は出せているのかなと我々は考えているところではあります。お答えになっていますでしょうか。

【半井　真司　委員長】

よろしいですか。はい、どうもありがとうございます。

最後に私の方から申し上げたいと思います。私もこの協議会、長く委員を務めさせて頂いておりまし

て、毎年、この資料の厚みが増えてきて、持ち帰るのが大変なことになってきているのですが、その分、やはりプログラムがしっかりと充実してきているなというのを感じているところでございます。

年に1回、こういう場で、あ、こういうプログラムもあったんだと知る機会が多いものですから、もう少し、相川委員も仰っていたんですが、世にこういうことをやっているという情報をうまく発信して、発信することによって、また反応する人も出てくるんじゃないかなと感じるところであります。それも是非またご検討頂ければと。

それからもう1点、四国ツーリズム創造機構の立場で申し上げますと、中期計画の5本柱の2番目に、持続可能な観光というのが出ておられます。四国ツーリズム創造機構で今、一番力を入れておりますのが、持続可能な観光ということでありまして、四ツーの場合でいくと、四国をとにかくサスティナブルな島、四国というブランディングを図っていきたいということで、四国の行政或いはDMOと一緒になって、持続可能な観光推進ネットワークを作り上げて取り組んでいるわけであります。

これは具体的にどういうことを取り組むかというと、もうご存じだと思うんですが、国際認証でGSTCというのがあるんですね。ここをクリアしたら、その国際認証を得られる。認証機関のGreen Destinationsというのがありまして、ここが毎年世界のトップ100選というのを選んでいるんです。実は、昨年は、正に髙濵さんのいらっしゃる丸亀市、それから、大洲市、徳島の三好市が選ばれているのですね。世界の100のうち、3つが四国。その前の年は小豆島町が選ばれているということでありまして、非常に全国的にもこの取り組みが注目をされつつあるという状態になってきています。是非、そういうふうな部分でも大学の方にご協力をお願いできたらなと。

これは何をするかというと、例えば、丸亀が選ばれたのは、うちわですね。うちわの伝統文化を残していこうということで、技術者の育成とか或いは販路の拡大に努める。正にサスティナブルなものにうちわ文化をしていくという取り組みが認められている。その辺の題材を見つけるというのは、正に大学としては非常に力もあるでしょうし、実力もあるということだと思いますので、是非そういう部分のご協力をお願いしたいと思います。私からは以上でございます。

【中村　正伸　研究科長】

ありがとうございます。たくさんあるいろんな種類の地域資源をどう打ち出していくのかというところも考えないといけないところだと思っています。打ち出し方というところは、まず課題だと思っていることと、これも期待値があるんですけれども、やはり観光人材をちゃんと育成してほしいというのは、いろんな所からお話をお聞きします。やはりそこでちゃんとお客様を迎え入れて、ちゃんとサービスを提供できる様な人材もそうですし、観光施策を考えていける様な人材というところの人材育成も求められておりますので、コンテンツというところと、あとはその人材というところを具体的なテーマとして考えていければと思うところです。ありがとうございます。

【半井　真司　委員長】

どうもありがとうございました。

一応、これで一巡はしたわけでございますが、他の委員の方のご意見を聞いて、何か追加でご発言があれば、お願い致します。よろしいでしょうか。

ちょうど時間が参りましたので、そろそろこの辺で意見交換を終了させて頂きます。委員の皆様には

ご協力ありがとうございました。
　それでは、最後、中村研究科長、締めをお願いします。

【中村　正伸　研究科長】
　長い時間、ありがとうございました。ちょっと私はまだ今日頂いた意見を全て整理できているわけではないんですけれども、今回はかなり宿題と言いますか、そういったものを去年と比べただけですけれども、結構頂いたかなと実は思っていて、しかも、テーマ一つ一つが非常に重いテーマなので、そこをちょっとどう優先順位をつけて議論していくのかというところを全体整理しながら、議論していかないといけないなというところです。
　たちまちにはそういった、今ある中期目標中期計画だとか、KPI の PDCA サイクルをどうするか、その辺は私の得意分野なのでできるかなと思ってはいるんですけれども、本質的な部分の課題を今日かなり頂いたと思っていますので、こういうものは研究科の中でもそうですし、或いは大学本部の方とも共有して、少し具体的な成果に繋がる取り組みをなるべく早く着手していきたいと思っている次第であります。
　学校もこれからどんどん変わっていくことを想定しておりますので、そこのところでうまく研究科としても特色を出して、大学本部とも連携していければいいかなと思っているところであります。
　ということで、本日は長い間、ありがとうございました。是非、今後ともご指導ご鞭撻頂きますことをお願い申し上げて、最後のご挨拶と致します。どうもありがとうございました。
（終了）

令和5年度教育課程連携協議会　説明資料一覧

香川ビジネススクール2023年度　　要覧・情報誌
香川ビジネススクール2024年度　　要覧・情報誌
2023年度　修学案内
学生募集チラシ

Ⅰ　トップライン

研究科の概要及び今後の課題と目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料1
アントレプレナーシップ育成プログラム（学長戦略経費支援事業）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料1
経営系専門職大学院認証評価について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料1

Ⅱ　全般

修了生・在校生の勤務先リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料2
令和5年・6年度入学状況 ・・・資料3
アントレプレナーシップ関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　資料4
外部資金受入一覧・・・資料5
令和5年度兼業一覧・・資料6
第19期生修了式・学位授与式・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料7
経営系専門職大学院一覧・・・資料8

Ⅲ　教育活動

授業評価アンケート・・ 資料9
令和5年度プロジェクト研究一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料10
「四国経済事情（地域活性化と地域政策）」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料11
「四国経済事情（地域活性化と地域資源）」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料12
「四国経済事情（地域活性化と企業経営）」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料13
合宿・・資料14
一般公開：「地域の中小企業と経済活性化」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料15
一般公開：「地域活性化と観光創造」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 資料16
香川ビジネススクール「ケースメソッド研究会」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料17
学生・修了生の活躍（ポストMBAプログラムを含む）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料18
地域金融人材育成構想・・資料19

Ⅳ　研究活動

NECとの共同研究・・資料20
EBPM研究会・・資料21

Ⅴ　社会貢献・イベント・広報

香川ビジネス＆パブリックコンペ2023・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料22
JA香川様向け研修・・資料23
第20回院生シンポジウム・・資料24
リカレントプログラム・・資料25
プロジェクト研究公開報告会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料26
ラジオで学ぼう！MBA地域マネジメント研究科・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・資料27
香川ビジネススクールに行こう！現役生・修了生との懇談会＆説明会・・・・・・・・・・・・・・・資料28

Ⅵ　創発科学研究科との連携

創発科学研究科との連携・・・資料29

Ⅶ　付録

新聞・雑誌記事・・資料30

令和５年度
国立大学法人香川大学大学院地域マネジメント研究科
第５回 教育課程連携協議会　出欠表

2024 年 7 月 10 日時点

	氏　名	会社名・役職	出 欠
経済界 （五十音順）	(議長) 半井　真司	四国旅客鉄道㈱　相談役 四国ツーリズム創造機構　代表理事	○
	綾田　裕次郎 (代理)菅　弘	㈱百十四銀行　代表取締役頭取 ㈱百十四銀行　取締役常務執行役員	× ○
	白井　久司	四国電力㈱　取締役副社長執行役員	○
	髙濵　和則	大倉工業㈱　代表取締役会長	○
	竹内　麗子	香川経済同友会　特別幹事	○
行　政 （五十音順）	大山　智	香川県　副知事	○
	加藤　昭彦	高松市　副市長	○
大　学	松永　裕己	北九州市立大学大学院 マネジメント研究科　研究科長	○
報道機関	相川　恵祐	ＮＨＫ高松放送局　局長	○
教員	中村　正伸	研究科長、教授	○
	原　　真志	副研究科長、教授	○
	板谷　和彦	教授	○
	大﨑　孝徳	教授	○
	西中　美和	教授	○
	三好　秀和	教授	○
	吉澤　康代	教授	○
	佐藤　勝典	准教授	○
	島根　哲哉	准教授	○
	長町　康平	准教授	○
	山本　靖	特命教授	○
	西村　美樹	特命講師	○

出席者２１名
陪席者２名
（石川、松岡）